

## 立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターのご紹介

センター長 石川 巧

立教大学は、2002年に旧江戸川乱歩邸と旧蔵書(和書13000冊、洋書2600冊、雑誌5500冊)と諸資料を一括して引き受けることになりました。2003年に豊島区指定有形文化財となった土蔵の改修、補強、復元を行い、翌年には「江戸川乱歩と大衆の20世紀展」を開催しました。

乱歩関連の寄託資料は、原稿、草稿、書簡、切抜資料、手帳、ノート、メモ類、戦時資料、読書ノート、評論執筆用資料、探偵小説や江戸文献に関するカード、雑誌編集や探偵作家クラブの運営に関する資料、書籍の書き込みに関する調査、脚本資料、映像資料、音声資料など、種々多様ですが、それらの活用に向けて全学的規模での検討が行われ、資料を整理・分類しつつ、同時に翻刻、閲覧、公開を進めていくことになりました。また、これらの貴重な文化遺産を活用するためには、対象を限定せず、幅広い大衆文化研究に結実させていくことが必要と考えました。

こうして、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターは2006年に設立されました。江戸川乱歩をはじめとするミステリー文学の研究はもとより、大衆文化を幅広く研究する機関として活動するため、研究雑誌『大衆文化』や『センター通信』を編集発行することになりました。

近年、江戸川乱歩は海外でも注目されつつあります。AAS(アメリカアジア学会)が企画した「乱歩コンファレンス」(2001年、シカゴ大学)を契機とし、「江戸川乱歩あるいは近代日本の迷宮」(2016年、パリ日本文化会館・テドロ大学)、「江戸川乱歩のモダニティ」(2018年、立教大学)などの国際シンポジウムが開催され、その言説と功績が再評価されつつあります。国内外においても、江戸川乱歩を通路とした大衆文化研究が活発に行われています。

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターは、そうした研究の拠点として機能し、貴重な文化遺産を次の世代へと継承していくことをめざしています。そのためにも、学内外からの幅広いご支援、ご協力をお願いする次第です。

## 江戸川乱歩 (1894-1965)

本名、平井太郎。1894年10月21日、三重県名張町(現・名張市)に生まれる。早稲田大学政治経済学科に学びながらエドガー・アラン・ポーやコナン・ドイルを読む。大学卒業後、多くの仕事を転々としながら探偵小説研究に没頭。

1922年、森下雨村が編集長の『新青年』に発表した「二銭銅貨」で作家デビュー。その後、「D坂の殺人事件」「人間椅子」「パノラマ島奇譚」「陰獣」「押絵と旅する男」などを次々と発表し怪奇小説、探偵小説の作家として絶大な人気を博す。

1929年の「蜘蛛男」以降、「魔術師」「黄金仮面」「黒蜥蜴」などの長編を娯楽雑誌に連載する。

1934年から『少年倶楽部』に「怪人二十面相」を連載。この少年探偵団シリーズは晩年まで続く。また、同時期から評論や海外ミステリーの紹介を手掛けるようになり、「鬼の言葉」(1934年)、「幻影城」(1951年)などにまとめた。

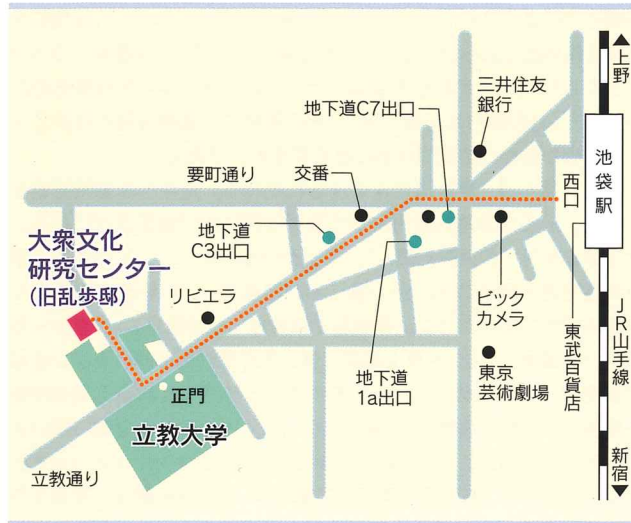
1947年、日本探偵作家クラブを結成し初代会長に就任。

1954年、江戸川乱歩賞を制定。

1957年から雑誌『宝石』を責任編集。

1963年、日本推理作家協会の理事長となる。

1965年7月28日、脳出血のため自宅で死去。享年70歳。



## 池袋キャンパス

- JR各線・東武東上線・西武池袋線・東京メトロ丸ノ内線／有楽町線／副都心線「池袋駅」下車。西口より徒歩7分。

## 立教大学江戸川乱歩記念 大衆文化研究センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1  
03-3985-4641  
rampo@rikkyo.ac.jp



公開などの詳細はコチラ

立教大学公式サイト(大衆文化研究センター)  
<https://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/rampo/>

(2021.9)

# 立教大学江戸川乱歩記念 大衆文化研究センター



# EDOGAWA RAMPO

MEMORIAL CENTER FOR  
POPULAR CULTURE STUDIES,  
RIKKYO UNIVERSITY

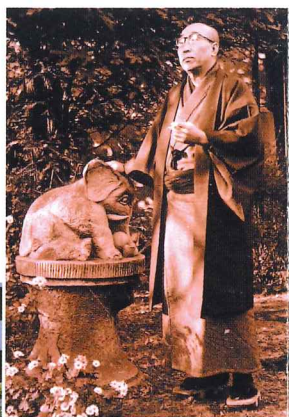
## (乱歩と立教大学)

「東京市二於ケル住居転々ノ図」(「貼雑年譜」)によれば、転居を繰り返した東京での乱歩の住まいは26ヶ所に及ぶ。そしてその26番目の住まいが、昭和7年に郡から区に昇格したばかりの豊島区池袋3丁目1626番地の家賃90円の土蔵付きの借家だったのである。

昭和9年7月に乱歩はここに居を定めた。すぐ近くには立教大学や系列の聖公会神学院があり、これが乱歩と立教大学との不思議な縁の始まりとなった。以後乱歩は、途中転居を考えたこともあったが、結局は昭和40年の没年までこの地で後半生を過ごした。そしてさらにそれから40年近くの歳月が流れ、2002年に旧乱歩邸と蔵書・資料が立教大学に帰属することとなったのである。

乱歩がなぜ池袋を選び、なぜ二度と転居しなかったかはいろいろ考えられるが、その前に居た芝区車町の喧騒な環境と比較して、転居当時の乱歩邸は「梅林」「つつじ」「畑」「芝」「築山」などに囲まれ、今とはおよそかけ離れたのどかさであったと想像される。そんな自然の豊かさが、中心部のごみごみとした雰囲気恋愛につかした乱歩を惹きつけたのかもしれない。

さらに戦時下には近隣の人々との信頼関係も生まれ、戦後は戦後で、今度は復興した池袋の繁華街が乱歩にとってホームグラウンドのような場所となる。またそのいっぽうで、立教大学とは家族を通してプライベートな絆が結ばれてもいった。今回乱歩邸が立教大学や地域のシンボルとして生まれ変わるようになったのも、こうしたさまざまな経緯を振り返れば必然の結果であったように思えてくる。

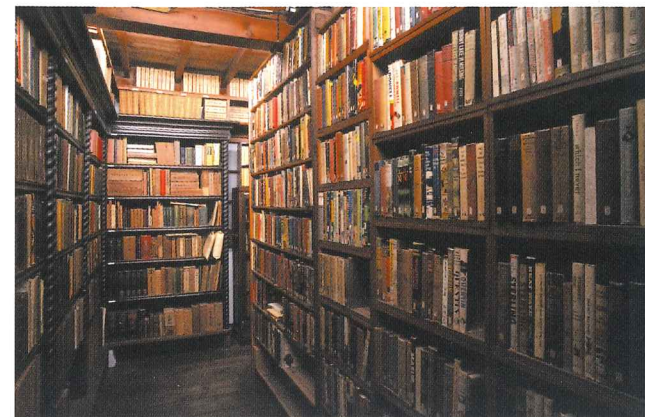
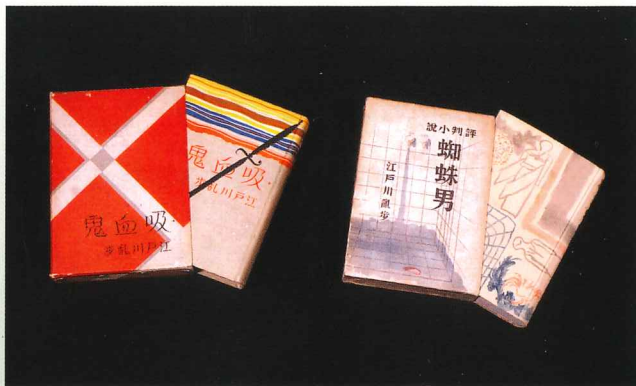


## (乱歩文学)

これまで乱歩ミステリーといえば、「D坂の殺人事件」などの初期の本格ミステリーと晩年の少年探偵団ものが取り上げられることが多かったが、大衆文化という観点から見ると、その二つにはさまれ、従来は軽く扱われてきた「蜘蛛男」や「吸血鬼」などのいわゆる通俗長編もののほうが注目に値する。昭和モダン期の大衆の圧倒的な支持を集めたこれらの作品にはそれ以前のさまざまな成果やノウハウが生かされ、また、これらを通してからこそ後の少年探偵団ものが誕生した、との見方も可能であり、その意味では通俗長編を乱歩ミステリーのかなめと位置づけることもできるのである。

関東大震災後、東京は大きく生まれ変わる。抜本的な道路整備が行われ、そこを急増した円タクが我が物顔に走り回ることになる。住宅地の郊外への発展も盛んで、各私鉄沿線を中心としてハイカラな新興住宅地が開発され、白い壁に赤い屋根の、いわゆる文化住宅が庶民の憧れの的となった。富裕層では暮らしも洋風化し、ソファやスチーム暖房、デスクや卓上電話を備えた洋風の応接間のモダンさは目を見張らせるものがあった。モボモガと称される洋装の男女が街を闊歩したのもこの時代で、裾の広がったズボンや丈の極端に長いスカートが流行した。そんな時代にふさわしく、モダンにイメージチェンジした明智が、お洒落な事務所に陣取り、大東京を舞台に悪漢たちと本邦初カーチェイスを繰り広げたりするのが、この時期の通俗長編の売り物だった。そこには自動車や電話はもちろんのこと、飛行船、気球、エレベーター、飛行機、モーターボートと、20世紀科学文明の粋が次から次と登場して、大衆読者の「あこがれ」をかきたてた。

それ以前の乱歩作品が「通」向けの、どちらかといえば閉ざされたものであったのに対して、大衆読者を意識して時代や社会を存分に取り込んだ通俗長編は乱歩ミステリーの可能性を最大限に拡張し、それがのちの少年ものへと引き継がれていった。通俗長編を経たからこそ、少年ものはミステリー性と通俗性とを兼備した人気作品となりえたのである。



## (土蔵と蔵書)

2003年3月に乱歩邸の土蔵は豊島区指定有形文化財に指定された。乱歩邸は最初大阪市東区の坂輔男家の別宅として建てられ、その後借家となり、昭和9年からは乱歩が住み、昭和27年に乱歩の所有となった。さらにそれが立教大学の所有となったのは2002年3月であり、その後立教大学では豊島区より補助を受け2003年度より土蔵の復原工事に着手し、2004年春に完成させた。2004年8月の「江戸川乱歩と大衆の20世紀展」以来、機会を設けて土蔵は公開しているが、内部や蔵書類の状態を良好に保つために、入り口付近までの公開としている。

蔵書の保存というだけでなく他にいくらかでも例があるが(たとえば東北大学の漱石文庫など)、書庫ごと保存されるのはきわめて稀である。しかもその書庫が一種独特な雰囲気を持った土蔵であり、かつ、その主が蔵書をめつたに処分しないタイプの蔵書家であるなど(この反対が、執筆が終わるとかなりの量を処分したとされる松本清張などの場合だ)、乱歩蔵書のありようはきわめて特異なケースといえる。ひとくちに「蔵書」あるいは「蔵書の保存」といっても、その内実は千差万別なのである。

ところで乱歩蔵書は主に ①土蔵内部 ②土蔵の外側の軒下部分を書庫に改造したもの ③母屋・洋館部分、の三つに分けて保存されてきたが、土蔵の復原工事にともない軒下部分の書庫は撤去され、現在は主に土蔵内部、母屋内の書庫、立教大学図書館の保存書庫に分散保管されている。それらの所蔵内容は立教大学図書館のホームページ上で確認でき、週一回は閲覧もできるが、その冊数は和書(翻訳書を含む)約13000冊、洋書2600冊、雑誌5500冊ほどである。また一般には未公開だが、950点、3500冊ほどの和本も別にある。作家蔵書といえば収書傾向や書き込み調査が定番だが、乱歩の場合、書庫ごと保存されるがゆえにわかる配置(没後の変更や追加を慎重に見きわめた上で)や使用頻度、利用上の特徴など、一種の書庫考古学/蔵書解体学が今後必要になってくるだろう。